

大を契機に、激しいデモや暴力行為が頻繁に起こっています。発展途上国であるブラジルやアフリカ諸国などはもとよりのことです。そうした分断や断裂はもともと社会の底部に潜在していたもので、それがコロナ禍によつて一気に表面化し、人々を怯えさせ、苦しめる。同時に、社会の末端から巨大な怨嗟の声となつて発せられ、遂にコントロールできなない暴力にまで至つてしまふ。平時には精巧に動いていた社会システムが、有事にはどれほど脆いものかを証明したのが今回のコロナ禍であると思います。

真に闘うべき敵は私たちの心にいる

コロナ禍によって露わになつた社会の分断・断裂について、もう少し掘り下げ考えてみたいと思ひます。それは、人間の内面的な問題、未知のウイルスに対する不安障害、強迫観念の問題です。諸外国のデモや暴動を見ていて感じるのは、新型コロナウイルスの正体がいまだ分からず、有効な治療薬、ワクチンも開発されていないという中で、人間の心に非常

に強い不安と恐怖が呼び覚まさっているということです。その累積が社会をヒステリー化させ、パニックを引き起こす要因になつていいのではないかと思われます。

生きとし生けるものにはすべて生存本能、自己防衛本能が備わっています。それはもちろん人間とて例外ではありません。その自己防衛本能、自らの生存を脅かす存在に対する不安や恐怖があるからこそ、人間はか細い人生を生き永らえてこられたのでしょうか。ですから不安や恐怖は元来、人間に備わっているものだと言えます。

ところが、人間の自己防衛本能は、時として自らの生存を脅かす存在を第三者、特定の他者の中に見出し、これを厳しく批判・糾弾する攻撃的な心理へと人々を容易に誘う危うさを持っています。

でも新型コロナウイルスに感染した人を非難したり、懸命に治療に当たっている医療従事者や、その家族をさえ差別する風潮が全国に広がりました。メディアも口を開けば、政権や自治体などに対する批判のオンパレードです。暴動にまで至らないまでも、日本社会に

もアメリカのような分断の危機に陥る芽が潜在しているのです。この強迫観念、反理性的な心理をどのように克服していくか。それが今後、新型コロナウイルスの第二波、第三波、あるいは、さらなる未知のウイルスがやってきた時に、私たちが社会の秩序を維持できるかどうかの最も重要なポイントになつてくるのではないかと考えます。社会を崩壊させるものが、我が内なる反理性にあることになります。不安恐怖を「異物化」し、これを本来あるべきものではないとして排除しようとすることで、私たちはますます深い不安、恐怖に沈んでしまいます。

そうであるならば、不安を不安として、恐怖を恐怖として「あるがまま」に見つめ、受け入れていいく以外にないのではないかと私は思うのです。そしてファクト(事実)とエビデンス(証拠)に基づき肅々と行動する。これはメディアにおいても同様です。いたずら

それからもう一つ、今回のコロナ禍で私の頭を過ったのは、感染症の脅威から日本を守ってきた先人たちの歴史的事例です。特に児玉源太郎、後藤新平という二人の凱旋してくる数多くの兵士に対し凱旋してくる数多くの兵士に対し実施した検疫事業は、感染者への対処、危機に際しての指導者の立ち居振る舞いという観点からし

先人が教える日本の生き筋

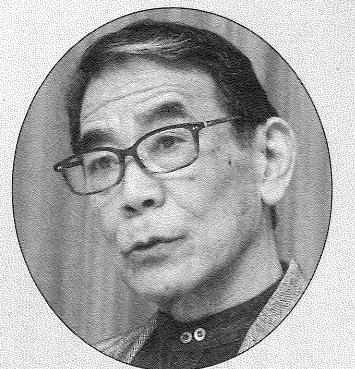
新型コロナウイルスといかに共存するか

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大がいまだ留まるところを知らない。

世界でも例を見ない「自粛要請」によって危機を乗り切った日本も、感染の第二波、第三波の発生をはじめ、あらゆる国家緊急事態に万全の備えをしておく必要がある。この先の見えない混迷と不安の時代をどう生き抜けばよいのか——政治、経済、歴史など様々な分野に通曉する拓殖大学学事顧問の渡辺利夫氏に、コロナ以後の世界の中で、いまこそ求められる心の構え、日本人の生き方について縦横に語っていただいた。

渡辺利夫 拓殖大学学事顧問

わたなべ・しお——昭和14年山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業後、同大学院修士課程修了、博士後期課程満期取得退学。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長、第18代総長などを経て、現職。外務省国際協力有識者会議議長、アジア政経学会理事長なども歴任。JICA国際協力功労賞、外務大臣表彰、第27回正論大賞など受賞多数。著書に『神経症の時代——わが内なる森田正馬』(文春学藝ライブラリー)『土魂——福澤諭吉の眞実』『死生觀の時代』(共に海竜社)『台湾を築いた明治の日本人』(産経新聞出版)などがある。



コロナ禍によって
露わになったもの

いまなお感染拡大が続き、世界を震撼させている新型コロナウイルス。感染者・死者の増加や医療崩壊、第二波、第三波の危険性がニュースで報じられる度に人々は不安心と恐怖に駆られています。普段、私たちは人間関係、組織、制度……ひと言でいえば精巧に仕組まれた社会システムの中で平穏な毎日を送っています。ところが有事においては、将棋の駒を一つ動かすことなく、社会の表面に露わになつてくることがあります。普段、私たちは人間関係、組織、制度……ひと言でいえば精巧に仕組まれた社会システムの中で平穏な毎日を送っています。ところが有事においては、将棋の駒を一つ動かすことなく、社会の表面に露わになつたものとは何かといえば、それは所得格差や医療格差、世代間、人種間の軋轢といった非常に厄介な問題です。その典型はアメリカでしょう。

有事で露わになつたものとは何かといえば、それは所得格差や医療格差、世代間、人種間の軋轢といった非常に厄介な問題です。その典型はアメリカでしょう。



後藤新平

安政4(1857)年～昭和4(1929)年。明治15年内務省衛生局に入局。31年台湾民政長官。39年南満洲鉄道初代総裁。その後内務大臣、外務大臣等の要職を歴任。大正9年東京市長に就任し、近代都市としての礎を固めた。

©国立国会図書館 近代日本人の肖像

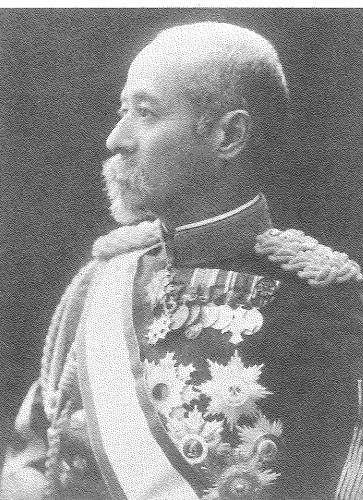
士を迎えるやり方か！」と、現場で指揮を執る後藤に対する非難には轟轟たるものがありました。この暴動寸前の状況を制したのも、果断をもって知られる児玉の権威と機略でした。旅順に出陣していった征清大総督の小松宮彰仁親王が五月二十二日に凱旋される。親王を説得し、兵士と同じ手順で検疫に臨んでいただければ皆の不満は一気に収まるだろう、という王が説得に諾として応じたことで、全兵士の憤懣は收まり、検疫事業は再開されることになります。

難題を果断に次々と解決していく児玉の非凡な判断力を見た後藤は、改めてこの人物についていこうと臍を固めることでしょ。記録によれば、僅か三ヶ月間で六百八十七隻、二十三万二千三百四十六人を検疫し、検疫所で罹患

が証明された兵士の数は真性コレラ三百六十九人、疑似コレラ三百十三人、腸チフス百二十六人、赤痢百七十九人に上りました。この数の罹患者が検疫なくして国内各地に帰還していたなら、被害は深刻なものになつたはずです。

戦争に明け暮れていた歐州諸国も、日本の検疫事業に強い関心を寄せ、特にドイツ皇帝ヴィルヘルム二世はその規模と効率性において先例のないものだと評し、賛辞を惜しまなかつたのです。

検疫事業の成功で「相馬事件」の汚名を雪ぐことができた後藤は、第四代台湾総督として赴任する児玉に同道、総督府民政長官として「土匪」を制圧、アヘン漸禁策、土地・人口調査、南北縦貫鉄道建設、糖業振興など、世界の植民地経営史に名を刻む数々の偉業を成し遂げるに至るのです。



児玉源太郎

嘉永5(1852)年～明治39(1906)年。戊辰戦争、西南戦争で活躍し、参謀本部、陸軍大学校で兵制の基礎を築く。陸軍大臣、内務大臣、文部大臣を歴任するほか、台湾総督として台湾の近代化に尽力した。

©国立国会図書館 近代日本人の肖像

と、同席していた陸軍省軍医監の石黒忠憲が「どうしてそんなにかかるか」と問います。後藤が理由を説明しようとするや、児玉はそれを遮り、こう言つたのです。

「百万円あればコレラを防ぐことができる」と君は言うんだね。よし、それでは百五十万円くらい出そ

と呼ばれる奇怪なお家騒動に巻き込まれて連座し、入獄。後には無罪を言い渡されます。衛生局長を辞任して浪々の身を託つてしましました。それでも児玉は後藤を抜擢します。一日会うや、「この男なら帰還兵二十四万人を任せられる」というのが児玉の直感でした。

後藤もまた相馬事件で酷い目に遭つた経験からもう役人はこりごりだら、児玉の申し越しに最初は遅巡します。しかし児玉の威厳と器量に圧倒され、最後は検疫事業に携わることを決めるのです。

実際二人が最初に面会した時のやりとりを見ると、後藤が児玉に圧倒された理由が分かります。

児玉は初めて会った後藤に「検疫事業の経費はいくらかかるか」と尋ねました。後藤が「百万円くらいはかかりましょう」と答える

いて次のように記しています。

「鋭敏な人だと思つた。といふのは私が取つてくる。後の一切は君に任す。どうか」と迫ります。

後藤は後年、この時の児玉について次のように記しています。

「锐敏な人だと思つた。といふのは悪疫が流行すれば、百万や二百万の金は忽ち飛んでしまふという事が直ちに分かる丈の頭があつた。当時の百万円は今の百万円と違ふザット一千円位に當る、児玉さんは其の百万円に驚かなかつた。それだけ大局を見る明があると決断に躊躇しない人であると云う事が分かつた」

児玉と後藤の検疫事業から見えてくる明治の教訓は、主に二つあります。

一つには、コレラという当時はまだ有効な治療法がなかつた感染症に対して、限られた資源を能う限り迅速果斷に凝集し、事態に対処しようとする危機管理意識を指導者が共有していたことです。あるいは、共通の危機意識を創り出すリーダーシップ、この人にならが指導者に備わっていた。

二つには、事態の対処に当たる指揮官に有力な人材を抜擢・配置し、彼らに現場指揮の全権を任せて事に臨むということです。特に専門知識と行政能力を兼ね備えた人物をトップに据える。そして、細かいことは言わず、現場の判断を信じ切り、任せ切る。そこには、自らの判断が正しいかどうかは後の歴史が証明する、という気概と豪氣もあつたのだろうと思います。

もちろん、明治と現代では、民主制度・機構・人権・私権尊重といった点で大きな隔たりがあり、

かくして児玉・後藤による大検疫事業が開始されます。検疫の場所には広島県宇品の似島、大阪の桜島、下関の彦島の三つの離島を設定。兵舎の造営はもとより蒸気式消毒缶と呼ばれる大型のボイラを導入して対処することに決まりました。消毒缶の設置は、後藤が衛生局時代に共に働き、ロベルト・コッホ研究所でも起居を共にした、当時に細菌学者として名を成していた北里柴三郎の助力を得ることで可能となりました。

一日に六百人を超える兵士を消毒缶で十五分、六十度以上の高熱で洗浄。火葬場まで建設。徹底した対策を講じます。後藤は命の危険が伴う最前線に立ち、不眠不休で陣頭指揮を執り続けました。

しかし、時間も手間も掛かる検疫手順に、一刻も早く故郷に勝利の錦を飾りたい帰心矢の如き兵士たちの不満が募つてきます。「これがあの酷い戦争を戦い抜いた兵

毒、沐浴、蒸気消毒、薬物消毒、という設計でした。さらに船舶消毒事業が開始され、火葬場まで建設。徹底した対策を講じます。後藤は命の危険が伴う最前線に立ち、不眠不休で陣頭指揮を執り続けました。

しかし、時間も手間も掛かる検疫手順に、一刻も早く故郷に勝利の錦を飾りたい帰心矢の如き兵士たちの不満が募つてきます。「これがあの酷い戦争を戦い抜いた兵

毒、沐浴、蒸気消毒、薬物消毒、

かくして児玉・後藤による大検疫事業が開始されます。検疫の場所には広島県宇品の似島、大阪の桜島、下関の彦島の三つの離島を設定。兵舎の造営はもとより蒸気式消毒缶と呼ばれる大型のボイラを導入して対処することに決まりました。消毒缶の設置は、後藤が衛生局時代に共に働き、ロベルト・コッホ研究所でも起居を共にした、当時に細菌学者として名を成していた北里柴三郎の助力を得ることで可能となりました。

一日に六百人を超える兵士を消毒缶で十五分、六十度以上の高熱で洗浄。火葬場まで建設。徹底した対策を講じます。後藤は命の危険が伴う最前線に立ち、不眠不休で陣頭指揮を執り続けました。

しかし、時間も手間も掛かる検疫手順に、一刻も早く故郷に勝利の錦を飾りたい帰心矢の如き兵士たちの不満が募つてきます。「これがあの酷い戦争を戦い抜いた兵

毒、沐浴、蒸気消毒、薬物消毒、

かくして児玉・後藤による大検疫事業が開始されます。検疫の場所には広島県宇品の似島、大阪の桜島、下関の彦島の三つの離島を設定。兵舎の造営はもとより蒸気式消毒缶と呼ばれる大型のボイラを導入して対処することに決まりました。消毒缶の設置は、後藤が衛生局時代に共に働き、ロベルト・コッホ研究所でも起居を共にした、当時に細菌学者として名を成していた北里柴三郎の助力を得ることで可能となりました。

一日に六百人を超える兵士を消毒缶で十五分、六十度以上の高熱で洗浄。火葬場まで建設。徹底した対策を講じます

人間を磨く 特集

ためにも、私たちは明治の教訓に学び、国家緊急事態の規定を日本国憲法に書き込む準備を疎々と進めていかなくてはなりません。

いかに生き、いかに死ぬか

日本人の死生観を問い直す

とはいって、強制力のない「緊急事態宣言」、自粛要請に頼るしかなかつたにも拘らず、ここ数か月の日本の対応は他国には信じられないほどの成果を残しました。

例えば、新型コロナウイルス感染による死者はアメリカ約十四万人、イギリス約四万五千人に対して日本は千人ほど。百万人当たりの死者にしても、イギリス約六十人、アメリカ約四百三十人に対して、日本は八人を下回っています。一時懸念された「オーバーシュート（爆発的な感染拡大）」も医療崩壊も起こっていません。

これをアメリカの『ワシントンポスト』は「コロナウイルスのミステリー」と呼び、日本の著名な先生も「ファクターX」つまりその理由は分からぬと言つてます。ただ、日本人がデモや暴動を起こさず、自粛要請を疎々と守り、手洗い・うがい、マスクの着用や

換気をしつかり行つていたという

の通りに戻つてきた、といった話がたくさん書かれています。

ですから、今回のコロナ禍で明

の治療で都内の病院に入院したの

ですが、見事に院内はガラガラ。

そして緊急事態宣言解除後、予後

検診のため再び同病院を訪れる

と大変な混みようでした。ここまで

自粛の効果はすごいものだったの

かと身を以て実感しました。

確かに、日本で新型コロナウイ

ルスによる感染者や死者が低く抑

えられている理由は「ファクター

X」、分からぬことなかもしれ

ませんが、私はどうもそれは日

本人が歴史の中で育み、磨いてき

た倫理観や道徳、規律や秩序を自

ら守るうとする国民性に帰するよ

うに思えてならないのです。

武士道の重要な徳目に「清潔」

という観念がありますが、これもいまの日本人によく残っています。

日本中どこにでも公衆トイレがあ

りますし、犬の散歩一つにしても、

犬の汚物を撒き散らしたままにす

る人はほとんど見当たりません。

また、江戸時代や明治時代に日

本を訪れた外国人の記録を読んでみると、宿屋に置き忘れた金品を

何か月後かに取りに戻つたら、そ

日本には、世界トップクラスの寿

命をさらに引き上げようとする思

想、とにかく生かしておけばいい

んだという生命至上主義が蔓延し

らかになつた他国との違い、数字

として得られた成果を「ファクタ

ーX」で終わらせ、その背後に

あるものは何なのか、知識人、日

本人一人ひとりが真剣に考えてい

かなくてはなりません。中国が行

ったような人々の人権と自由を蹂

躪する強権的手法とは対極にある

「日本モデル」が、これから襲つ

くる可能性のある第二波、第三波

でも成果を残すとなれば、本格的

な日本の「ソフトパワー」となる

ことは間違いないでしょう。

そして、新型コロナウイルスで

は特に高齢者の方が多く亡くなら

れましたが、最後にぜひ触れてお

きたいのが死生観の問題です。

日本の平均寿命は男女共に世界

トップクラスですが、その中には

人工呼吸器や胃瘻など様々な生命

維持装置の装着を余儀なくされて

いる方が相当含まれています。私

も、延命処置によつて實に苦しくも切ない最期を迎えた身内や友人

問題を考え、自らの生き方を磨い

ていくことが、本当に幸せな人生、

日本の確かな未来に繋がつっていく

はずだと私は信じています。